IS《インフィニット・ストラトス》　不滅の刃の名を持つIS

ぷう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）　不滅の刃の名を持つＩＳ

【Ｎコード】
Ｎ５０６８Ｓ

【作者名】
ぷう

【あらすじ】
何の変哲もない、どこにでもいる軽いヲタの入った高校生が突然、心臓発作で死んだ。彼が目を覚ますと、髭のおっさんが土下座をしていた。「すまぬ、間違ってコロシチャッタ。テヘッ☆」　てんめええええええええ！！！？侘びに好きなアニメの世界に転生させる！？じゃあ、マクロスＦで。「あ、無理だの。変わりにそれっぽいとこに送ってやる」なにいいいいい！？

※最強テンプレものです。苦手なかたはＲＥＴＵＲＮを。更新に時

間がかかるかもしれませんが、長い目で見てやってくださいな

第1話　プロローグ～俺と神と別世界！？～（前書き）

まぁ、大半が駄文ですが、お付き合いくださいませ

第1話　プロローグ～俺と神と別世界！？～

「やっぱ、ボカロはいいなぁ・・・」

日曜のとあるマンション。その一室の部屋にこの物語の主人公はいた。
名前は『篝刹那（かがりせつな）』。高校2年、彼女イナイ暦　年齢という、残念な人生を送ってきた少年。
今は、ボーカロイドの曲をＭＰ３で聴いていた

「はぁ・・・暇だな～、何かいいことないかなぁ」

Ｔｕｒｒ・・・・・

携帯が鳴っている。ディスプレイを見ると、悪友からだった

「もしもし・・・ああ・・・マジで！？でてんのか？ＤＸ超合金のデュランダルバルキリー・・・・・おう、すぐ行く」

携帯をしまって、すぐに着替える。財布を持ち、携帯を持ち、準備は整った。

そして、歩き出そうとした瞬間

”ドクン”

「ぐぅっ・・・・・・！？」

刹那は胸を押さえて蹲る。何が起こったのかわからず、とりあえず悶えながら携帯を取り出そうとする

「は、はや・・・く・・・っ！」

やっとのことで携帯を取り出した刹那
そして、１１９番にコールしようとし、通話ボタンを押した瞬間

”ドックン”

「かはっ・・・！！」

Ｔｕｒｒｒｒ・・・・・

「もしもし、こちら救急通信司令室、どうされました？・・・もし

もし？どうされ・・・・・・」

息絶えた少年の横で通信司令室のオペレーターの声だけがむなしく
響いた

・・・ここは・・・どこだ？
真っ暗だ・・・・俺は・・・・・死んだ・・・・・・のか・・・・・？

夢か幻か現実かわからないところを漂っている感じがする
そして・・・目の前が眩しくなり、目を閉じる
次に、目を開いたとき・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・」

髪をもっさり蓄えたおっさんが土下座していた

「・・・・・・誰？あんた」

「ワシは、この宇宙の神じゃ」

なんか・・・電波なおっさんが・・・ガクブル

「まぁ、この際ワシの悪口はどうでもよい。そんなことより・・・すまん、間違ってコロシチャッタ。テヘッ☆」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・な・・・・・・!?

「んだと、このヤロオォォォォォォォォォォォ!!?」

「う、うむ、お前さんのその気持ちはよくわかる。じゃから特例として、好きな世界に転生させてやろうということになったのじゃ」

転生・・・?なんかよく二次小説とかにある話そっくりだな

「ど、どういうことだよ?」

「せっかくなのでな、お前さんの能力を上げてどの世界にも適応できるようにして、その世界にあった”役に立つモノ”を一つ、やろう」

・・・な、何か・・・・・・いいんじゃね?・・・・・となれば

「さっそく、決めさせてもらっていいか?」

「その前に・・・ほいっと」

おっさんが指を振ると、光が体の周りを回りながら、足元までくる

「これで、常人以上のスペックになったはずじゃ。ほれ」

おっさんが銃を取り出し・・・

”バァンッ！”

ぶっ放してきた。

「うおっ！？」

俺はその銃弾を目で捉えながら体を、『マトリックス』であったように仰け反って、かわし、再び体を持ち上げる。

「おい！アブねーだろうが！！」

「じゃが、かわせたじゃろう？」

「あ・・・・・確かに」

多分、死ぬ前の俺なら気づかずに死んでいただろう。

「まぁ、今のお前さんなら相手の視線や銃口の向きでどこを狙われてるかわかるじゃろうから、滅多な怪我もせんじゃろ」

「よし、じゃあ俺はマクロスFの世界に行くぜ！」

「ん・・・・・・・・・・・・あぁ、すまん。そこは無理じゃ」

「なにぃぃぃぃ！？」

「代わりに、似たような世界に送ってやるからそれで我慢せい。・・・・ポチッとな」

抗議する刹那の下の空間が丸く空いて、急速に落下する

「ジジィ！覚えてろよ～！！！！」

「・・・次会うときはウン十年後じゃ、達者での～」

こうして刹那はどことも知れない世界に転生したのであった

第1話　プロローグ～俺と神と別世界！？～（後書き）

え～・・・なかなか長文になりませんで・・・
もっと長い方がいいかたにはご迷惑をかけますが頑張っていきます
のでご容赦ください

第2話　拳骨～あれは・・・凶器さね～（前書き）

え～、お暇でしたら感想等くださいね？

この物語は基本三人称です

第2話　拳骨～あれは・・・凶器さね～

ＩＳ学園・中庭

今、中庭には篠ノ之箒（しののほうき）、そして織斑一夏（おりむらいちか）がいた

この世界では、我々の世界のような現代兵器ではなく、十年前に登場した、ＩＳ（インフィニット・ストラトス）が台頭している。原因はとある事件でＩＳの能力が従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能を持つことが世界中に知れ渡り、ＩＳ本来の宇宙活動よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がＩＳに移っていったのである

その後、アラスカ条約に基づいて、ＩＳ操縦者育成用の特殊国立高等学校『ＩＳ学園』を日本に設立した。
某Ａ国が、日本人が製作したＩＳによって混乱を招いたので、日本国に責任を持って人材管理と育成を行い、そこの技術は提供し、運営資金は日本国で賄うようにと言ったのがＩＳ学園の始まりである。
怖い国である、某Ａ国

しかし、このＩＳ、致命的な欠点がある。それは女性しかＩＳを動かせないこと。
そのため、ＩＳ学園には女生徒しかいない。え？さっき男が居たって？

彼、織斑一夏はこの世界では珍しくＩＳが動かせる。と言っても、世界で一人だけなのだ。

「それにしても、全然わけわかんねぇぞ・・・ここの授業」

「お前が入学前にもらった参考書を捨ててしまうからだろうが」

「う・・・・・」

一夏は押し黙ってしまう

確かに、箒の言うとおりである。捨ててしまったのは一夏なのである

「大体、一夏はだな・・・・・」

「ちょ、ちょっとまて箒」

「なんだ？話を逸らそうなどとは・・・」

「ちがうって、あれ、見ろよ」

一夏に続いて、箒が空を見上げると・・・・・

「・・・流れ星か・・・ん？」

箒が異変に気づく

「おかしいな、なかなか消えないぞ・・・？」

「というか・・・こっちに来る！？」

一夏がそう言って箒の手を握ってその場から離れる

ドゴォォォォン！！

中庭の一夏たちがいたところに流れ星が落ちた。砂煙で何も見えない

「い、一夏・・・・・そろそろ、手を離してくれないか・・・・・？」

「お？ああ、わりぃな」

一夏がパッと手を離す。余りにも簡単に手を離すので、少しがっか

りした箒だった

「だけど・・・いったい何なんだ？」

「・・・調べてみるぞ」

「お、おい・・・・・箒」

二人は砂煙の少し治まったので、落下場所に向かう。そこで見たものは・・・・・・

「・・・・・人・・・・？」

そこにいたのは、人間。しかも日本人だった。
どうやら、落下の衝撃で気を失っている。

「一夏、千冬さんを呼んで来い」

「千冬姉だな、わかっ・・・・」

スパァン！！！

「「っっ！？」」

予期せぬ頭の衝撃に、そして食らい覚えのある痛みに恐る恐る振り向くと・・・

「織斑先生と呼べ、この馬鹿者が」

織斑先生が立っていた。先ほどの衝撃は手に持っていた出席簿で叩かれたものであった

織斑千冬（おりむらちふゆ）。ＩＳの世界大会『モンド・グロッソ』の第１回大会の総合優勝者。名前のとおり、織斑一夏の姉であり、元日本代表。モンド・グロッソの総合優勝者に与えられる称号『ブリュンヒルデ』を与えられている。

「で、先ほどの衝撃の原因はこれか」

千冬が落ちてきた少年を観察する。ふと、その視線が腕のブレスレットに向く。
少年の姿格好は至ってとくに普通の少年である。が、腕についたブレスレットには小さいが剣のアクセが付いていた

「・・・・・・・・・・」

千冬が黙ってそれを見ている。その様子を一夏たちは怪訝そうに見ている
そして、騒ぎを聞きつけてきた生徒たちが集まってきたのを見た千冬は

「とりあえず、こいつは医務室に連れて行き、目を覚ましたら事情聴取を行う。篠ノ之と織斑は教室で待機だ」

「「は、はい！」」

医務室―（保健室）

「んっ・・・・・」

神に―（間違って）殺され、転生して別の世界に送られた篝刹那（かがりせつな）は、見慣れない部屋で目を覚ました
その部屋は、独特の消毒臭がする保健室だった。体を起こすと、窓際で電話をしてた女性がこちらに歩いてきた

「目を覚ましたか。では事情聴取を行う」

「・・・え？ちょっ・・・・」

「なんだ？」

ギロリと睨んでくる千冬に怯える刹那。それほどに鋭い眼光であった

「・・・では、まず名前から聞こうか」

「・・・篝刹那」

「篝か、幾つだ？」

「17っす」

「・・・・・おいおい、もう少し上手い嘘をつくんだな」

「はぁ！？嘘なんか・・・・」

そういった刹那に鏡を渡す千冬

その鏡に映った刹那は、小学生ぐらいの容姿で写っていた

「え・・・な、なんで？」

「・・・何か理由がありそうだな・・・話してみろ」

刹那は返答に困った。話しても信じてもらえるかわからなかったからだ

「どうした、答えられないか？」

「あ、いや・・・実は・・・」

刹那はこれまでの経緯を話した

「・・・・・にわかには信じられんな」

「はぁ・・・といっても信じてもらうしかないんですが・・・」

「ふむ・・・ところで、あのＩＳだが・・・」

「・・・ＩＳ・・・ってなんですか？」

刹那はＩＳを読んでいなかったので、ＩＳを知らないのも無理はなかったのである

「正式名称は『インフィニット・ストラトス』といって、宇宙空間

での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツだ」

「・・・で、それが俺に何の関係が？」

「・・・来い。実際見たほうがいいだろう」

刹那は保健室を出て、ＩＳのアリーナと呼ばれる場所に連れて行かれた。そこのピットと呼ばれる場所に2、3人の教師がおり、そのうちの一人の緑色の髪をした大人しそうな人物が、刹那にブレスレットを差し出す

「では、あなたのＩＳはお返ししますね」

「は・・・・・え？これがＩＳ・・・ですか？」

「それが、ＩＳの『待機状態』と呼ばれるものだ。一度、『展開』させてみろ」

「えっと・・・やり方とかは？」

「「展開！」と叫ぶんだ」

緑髪の先生が明らかに疑問の顔をしたのだが、刹那は気づかずに頷き

「展っ！開っ！」

思い切り叫んでいた。自身、こういうのは嫌いではないらしい

その瞬間、ブレスレットから光の粒子が溢れ出し、ＩＳを形成する。その姿はさながら『ＶＦ－２９　デュランダル』そのバトロイド形態であった。神がマクロスの世界に行けなかったことの侘びとして送ったものだった

「ふ、全身装甲（フル・スキン）とは・・・珍しいですな」

「そうですね・・・って、織斑先生？」

「クックック・・・ほんとに言うとはな」

笑う千冬を見た刹那は、ジト目で見ながら

「・・・まさか、言う必要なかったんですか？」

「まぁな。とはいえ、お前もノリノリだったではないか」

「う・・・ま、まぁ・・・そうですけど」

「まぁいい・・・なるほど、しかし、装甲が薄いな・・・武装は・・・最初から展開済みか・・・ふむ・・・しかし・・・この４発式のエンジンは何だ？スラスターはあるから戦闘には支障はないだろうが・・・」

「あの・・・これって変形出来ないんですか？」

その言葉に、教師陣から笑いが起こった

「おまえな・・・変形なんかして見ろ、体の形が変わるぞ？」

「むぅ・・・」

その言葉に納得しかけたその時

「あ・・・お、織斑先生・・・その、これを・・・」

千冬が目を通したディスプレイにはこのＩＳの『変形』について記されていた。勿論、搭乗者は死なない変形について

「山田先生・・・そういうことはすべて伝えてください」

「す、すみません・・・」

何度も頭を下げる山田先生の頭に手を置いて慰める千冬。その瞳はそれはそれは潤んでいたという。

「よし、それでは起動試験を開始する。動かし方はわかるな？」

「は、はい！」

機体を浮かせ、ピットから出て飛翔する。

「すげぇ・・・すげぇよＩＳ！」

興奮のあまり、アリーナの中を高速で飛び回る刹那。

「落ち着け。既に初期化（フォーマット）が始まっているからな、先に武装のテストを始める。今からターゲットを出す。それを全てど真ん中で撃ち抜け」

「え、ど、ど真ん中！？」

「では、始め！」

空中には既にターゲットが出ている。刹那はとりあえず、手持ち武器の『ＨＰＢ－０１Ａ　重量子ビームガンポッド』を構えて、ターゲットを撃ち抜く。

その後も、順調にターゲットをど真ん中で撃ち抜く刹那。神に能力を上げてもらったおかげである

「よし。では・・・」

目の前に、鎧武者のようなＩＳが立ちはだかる。その操縦者は千冬。

「私を落として見せろ」

言うや否や斬りかかって来た千冬、それをなんなくかわす刹那

「くっ・・・確かバルキリーに格闘武器はなかった筈・・・ええい！」

刹那はビームガンポッドからビームの雨を、『ＭＢＬ－０２　マイクロミサイルランチャー』からミサイルを撃ち、弾幕を張る

「ほう、私に接近を許さないつもりか。正しい・・・・・が」

千冬はビームの雨を華麗にかわしながら、ミサイルを斬り捨て、刹那を正面に捕らえる。

「さあ、どうする！」

千冬は刀を振り下ろした

「ぐぁぁ！！」

刹那は斬られた反動で地面に墜落し始める

「くそっ！」

刹那はスラスターを吹かして体勢を整え・・・

ガシャン！！！

一瞬でバトロイド形態からファイター形態に変形をして見せ、千冬から離れる

観客席に居た生徒は皆が驚愕の表情だった。それもそうだ、元来、ＩＳは変形しないのだから。

「速い！なんというスピードだ！」

アリーナのシールドに沿って飛行する刹那に千冬は追いつけない。

そしてそのまま刹那が千冬の後ろに回り

「いけぇぇぇ！」

ビームガンポッドを乱射する

「くそっ・・・うわぁぁっ！」

乱射したビームが千風に直撃し、煙から千冬が飛び出し、落下していく

「ちょっ・・・やりすぎた！？」

バトロイド形態に変形し、千冬を助けようと近寄ったとき

「掛かった」

千冬は体勢を翻し、刀で刹那を突き上げた。

「うわぁぁぁぁ！！」

『シールド・エネルギー、０。勝者、織斑千冬』

「いって～・・・あんなんありかよ・・・」

立ち上がった刹那のＩＳが一瞬輝き、光が治まれば、先ほどのよりもより丸みを帯びながらもシャープになったＩＳになった

「どうやら、最適化（フィッティング）が終わったようだな。これでそのＩＳはお前専用になった。大事にしろよ」

「・・・俺専用・・・か」

その言葉を呟きながら、刹那はピットに戻った

アリーナ内　ピット

「いつつ・・・容赦なさすぎですよ、千冬さん」

ゴツッ

「いっ・・・てぇ！？」

「織斑先生だ、馬鹿者」

小学生でも、容赦がない千冬。

「え・・・？」

「お前は明日から、このＩＳ学園の生徒になる。その年での専用機持ちは例を見ないケースだからな。飛び級になるが構わんだろう」

千冬は一応、学園の上層部と教師には刹那の状況は伝えてある。それを踏まえての学園の判断が『入学させる』なのだ

「よし、では部屋に案内する。荷物は持てるか？」

「持てますよ・・・ふんっ・・・！」

両手で持ちながら、のろのろと歩き始める刹那を見た千冬は

「無理はするな」

と言って、鞄を持ってくれた。

（案外・・・いい人なんだな）

「さっさと来い」

「あ、はい！」

こうして、刹那はＩＳ学園に入学した

次の日、騒動に巻き込まれることも知らずに

第2話　拳骨～あれは・・・凶器さね～（後書き）

感想、お待ちしてます

第3話　宣戦布告～イギリス?行った事ないね。～（前書き）

あらすじ・・・・・刹那、ＩＳ学園入学

第3話　宣戦布告～イギリス?行った事ないね。～

一年一組　教室内

「え～、皆さん。今日は素敵なお知らせです、このクラスに転入生がやってきます」

教室内がにわかに騒がしくなる
刹那はその様子を耳にする

（・・・大丈夫かな、女子だらけだけど・・・）

「え～、静かに。ただ年齢的に特殊なケースですので、そこのところはよろしくお願いしますね。では、入ってきてください」

その声に、刹那はドアを開けて、教室に入る。
わかっていた事だが・・・ほぼ全員がポカンとしている。一番前の一夏と窓際の箒はそんなに驚いてない

（どうやら、あいつらが俺を見つけたやつか）

刹那はそんなことを思いながら、教壇の横に立つ

「え～、では自己紹介をお願いしますね～」

「篝刹那です。まぁ、趣味は特にないですが・・・とりあえず、学園最強を目指してみます。よろしく」

なんとも、はたからみたら『小生意気なガキ』である

「・・・なに？小学生？」

「学園最強って・・・かわい～♪」

「クールな小学生も・・・いいわね」

刹那は一礼して、頭を上げる

「ククク・・・言うね、このガキは」

「え、え～・・・じゃあ、篝くんの席は・・・織斑くんの隣です。織斑くん、いいですね？」

「は、はい」

「よし。では授業を始める」

教室　休み時間

「な、なんなんだ・・・ここの授業・・・ついてくのがやっとだ」

刹那は机に突っ伏した

「いやいや、それでもすげーって。俺なんかちんぷんかんぷんだぜ・・・」

隣の男子が話しかけてきた。たしか・・・

「織斑・・・だったか？」

「おう、織斑一夏だ。ってか敬語じゃないんだな」

「まぁ・・・使う必要性もないし・・・解らないんだったら解る範囲で教えようか？」

「お、マジか？」

一夏が少し、嬉しそうに応えたところで、声をかけられた

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「あん？」

話しかけてきたのは、金髪に縦ロール、通称『ドリル髪』の女生徒。
名をセシリア・オルコット。
白人特有のブルーの瞳が、ややつり上がった状態で二人を見ていた
そのロールがかった髪がいかにもな高貴なオーラを出しており、セシリアの雰囲気も『いかにも』な感じだった

（・・・うわ、いかにもなお嬢様タイプだな、こりゃ）

「ちょっと聞いてますの？お返事は？」

「何なんだよ、俺たちは今から復習するんだよ。用があるならさっさと済ませろよ」

刹那がそう答えると、まぁ、わざとらしく声を上げた

「まあ！なんですの、そのお返事は。私に話しかけられること自体が光栄なことなのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

刹那と一夏は表情を変えずに同じ事を思っていた

（（・・・・・また、めんどくさいのが来たな・・・））

刹那は、軽くため息をつき、拒絶１００パーセントの声で言い放った

「・・・・・ていうか・・・誰？あんた」

この答えは、セシリアにとってはかなり気に入らなかったものらしい。吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「知るか、ボケ」

刹那は辛辣に言葉を投げつけた。一夏ですら軽く驚いた。

「大体、代表候補生ってそんなに偉いわけ？」

「国家代表候補生というのは、国家代表ＩＳ操縦者の候補生として選出されるエリートのことですわ！」

自慢げに語るセシリア。だが刹那の反応は冷ややかで・・・

「あっそ、で・・・そのエリート様が何の用？」

セシリアの額に怒りマークが浮かび上がる。しかしそこは代表候補生。なんとか怒りを静める

「ま、まぁでも？わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

なんと、この態度が優しさなのか・・・そんな優しさなら溝に捨てるが

「ＩＳのことでわからないことがありましたら、まあ・・・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「え？俺も倒したぞ、教官」

「は？」

（一夏は倒したのか・・・すげーな）

「まあ、いきなり突っ込んできたのをかわしたら、壁にぶつかってそのまま動かなくなっただけだけどな」

刹那は椅子からずっこけた。ドリフなみである

「そ、そうですの・・・」

「それから、ＩＳのことは刹那に教えてもらうから・・・いいぞ？」

「ほう・・・？では、その刹那さんとやらは、入試はどうでしたの？」

「ああ・・・倒せなかったな」

「そうでしょう、そうでしょう！」

刹那はセシリアを見て『何がしたいんだ、この馬鹿は』と思ったが、あからさま過ぎたので、言わないが、とりあえず、追加補正はする

「相手は、織斑先生だったからな。ほかの教員ならどうってことなかったな」

「そ、それはどういう・・・・・」

キーンコーンカーンコーン。

話しに割って入ったのは、二時限目のチャイムだった。刹那にはこの音が福音に聞こえた。

「っ・・・・・！また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

（さ・・・次の休み時間はどこに行くか）

刹那はどう逃げるか画策していた

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

この時間では、真耶ではなく千冬が教壇に立っていた

余程大事なことなのか、真耶までノートを手に持っていた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

千冬が思い出したように言った。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

（なるほど・・・いわゆる『学級委員長』みたいなものか）

教室がざわつき始める。
刹那はとりあえず、だんまりを決め込んだ。面倒くさいと思っているのである。

「はいっ！私は織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

（がんばれよ、一夏・・・）

「私は篝くんを推薦します」

なに？

「俺もそれがいいと思います！」

「一夏！お前！」

「では、候補者は織斑と篝。他にはいないか？」

（や、やばい・・・このままでは面倒くさいことになる）

刹那は他に適任者がいないか考える
その時、刹那に一筋の光明が射した

「待ってください！納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのはセシリア。どうやら男がクラス代表になるのに猛反対らしい

「このような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなん

ていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「・・・お前が出ることが恥さらしだろ・・・」

刹那は聞こえないように毒づく、一夏は隣で苦笑いしている

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのが必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスする気は毛頭ございませんわ！」

「え～・・・・・イギリスも島国だろーが。なめやがって、あのドリル・・・」

刹那は相当イライラが溜まってきていた。教室も微妙な空気に包まれている

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で・・・・・」

ブチッ

「少々口が過ぎるぞ。黙れ、ドリル女」

「なっ・・・・!?」

刹那がブチ切れて、セシリアに毒を直接吐いてしまった。
途端に、セシリアは真っ赤になって怒りのボルテージを上げていく

「あっ、あ・・・あなたねぇ!わたくしを侮辱しましたわね!?」

「あ～、さすがにその腐ったおつむでも理解できたか、偉い偉い」

わざとらしく拍手をする刹那。その容姿からは想像できないほどに
濃い毒を吐く刹那に、ほぼ全員がポカンとしていた

「・・・っ・・・・・・決闘ですわ!」

「そのほうが解りやすいな。いいぜ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い・
・・いえ、奴隷にしますわよ」

「うわ・・・なんかイタイ奴だな。まぁ、負けねーけどな・・・」

刹那は中指を立ててセシリアを挑発した

「いっ、いいでしょう・・・今ならハンデを付けてもよくってよ？」

「ドリル女にもらうハンデも、やるハンデもねぇ」

「いちいち癇に障る・・・後でほえづらかいても知りませんわよ？お猿さん？」

「はっ！調子に乗ったメス豚を躾けるにはちょうどいいぜ」

バチバチと二人の間に火花が散る

「貶しあいも結構だが　授業だ、席にもどれ」

こうして、セシリア対刹那の試合が決定した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5068s/

IS《インフィニット・ストラトス》　不滅の刃の名を持つIS

2011年4月18日22時53分発行